

觀世音菩薩の起原

芳岡良音

觀世音菩薩は無量壽經、華嚴經入法界品、法華經の諸異本を初め、思益梵天所問經、成具光明定意經、光讚般若經、摩訶般若波羅蜜經、勝天王般若波羅蜜經、維摩詰所說經、大寶積經郁伽長者會、同無垢施菩薩應辯會等にその名が現れて居り、大乘佛教の成立當初から廣く知られていた菩薩である。

觀世音は一般に Avalokiteśvara の譯名とされ、īsvara とある所から印度教の Śiva 神を連想するのであるが、觀世音の音は svāra の譯で、初めは新疆省出土の普門品古寫本に記されているように Avalokita-svāra であつたのが、後に Avalokiteśvara に轉化したと見るのが穩當であろう。

觀世音は一般に世間の音聲を觀ずるといふ意味に解釋されているが、これは羅什譯の法華經普門品に「若有無量百千萬億衆生受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩即時觀其音聲。皆得解脫。」（大正藏九 56c）とある所から生じた解釋である。所が正法華經ではそこは「若有衆生。遭億百千婁困厄患難。苦毒無量。適聞光世音菩薩名者。輒

得解脫。無有衆惱。故名光世音。」（同 128c）となつて居り、梵本もまたこれと同趣旨である。更に普門品偈には「妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念」（同 58a 梵本南條譯「音聲輪を満足せる 觀自在菩薩を念すべし」とあり、六十華嚴入法界品の觀音訪詣の條に「放大光網。除滅衆生諸煩惱熱。出微妙音。而化度之。」（同 178b）とあるから、Avalokita が觀世で、svāra は名號の妙音聲の意である。特に正法華經普門品に、海商人が衆寶を滿載して航海中、大風のために鬼界に漂流して魔竭魚に値い、光世音菩薩の名號を稱して解脫を得たとあるのは、（同 129a）明かに Mahāvastu にある Meghadatta の傳承（五逆を犯した Meghadatta が怪魚となつて魔海に棲み、五百の海商人を飲もうとした時、名號を聞いて永劫の昔佛名を聞いたことを想い起し、口を閉じて餓死し、人界に生れて佛に救濟された話、同書一 25b）を承けているので、ここでは名號の妙音聲の功德を説くことが主題となつている。觀音信仰の中心が名號の徳の讚仰にあることは、彌陀信仰に

結ばれて行く契機を示すものとして注目を要する。

次に Avalokita の意義について重要な示唆を興えているのが Mahāvastu の中に全文収録されている Avalokita-sūtra である。(寂天の大乗集菩薩學論の中に觀察世間經 avalokita-sūtra の名で引用されている獨立經典で、西藏譯もある。)この經典は釋尊の成道の因縁を説いたもので、そこでは釋尊が菩提樹下の禪定に入られたのは、一に人天の利益安穩のためなることを強調し、「菩薩として彼が菩提樹に來り、菩提の實座に立ち、全世界の利益安穩のために觀察せる時、彼の見たることを世尊をして開示せしめよ」Mahāvastu II: 294) 釋尊がそこでつぶさに一切世間の有情の業繫を觀察し、衆生のこれより解脱すべき道を體得され、「時に比丘等よ、菩薩は恐れなく狼敗せず恐怖を離れて、初夜に内省と天眼とによりて與えられたる達識と通曉の熟慮に、彼の心向け注げり。明晰人に超え優れたる天眼により、死して再生せる有情、淨穢の有情、善趣と惡趣に近く有情、貴賤の有情、その業に由りて或る境界に達せるすべてのものを觀たり。彼は言えり。友よ、身口意の業に於いて不行跡にして罪あるこれ等の有情、聖者を誹謗し、惡見を支持せるこれ等の有情は、外道の業を結べるが故に、その起因と理由のために、死して體壞すれば破滅の道、惡趣、零落、地獄に再生せり。友よ、他方身口意の業に於いて善を行じ、正見を持する聖者を誹謗せざるものは、その起因と理由とはより、死して身壞すれば天界に再生し、諸天の中にありと。

觀世音菩薩の起原(芳岡)

……菩薩は中夜に心を彼の前生の記憶と知識に向け注げり。……後夜の曉方、黎明の明け初むる時……彼は念の一瞬の閃きに得られたる智眼によりて、等正覺に目覺めたり。即ちこれは惡なり、これは惡の生起なり、これは惡の滅なり、これは惡の滅に導く道なりと理解せり」同 238-、340) 釋尊の成道を妨げるために襲い來つた惡魔の軍勢を粉碎し降伏する威神力を現わし、人天を魔障より解脱せしめ、安穩を得しめる道を切り開かれたことを記し、「如來が加護を求めらるべきなりと汝の思えるは、汝にとりてよきことなり、實に汝にとりてよきことなり。かくてまたこの法の解説に通達せる同輩には、業果は清めらる。彼等は魔の力に落ちず、人も幽鬼も彼等を害する機を持たざるべし。」同 287: 315, 340) このような菩薩行によつて成就された佛の威神力を尊敬し、佛塔を供養するものは、火も毒も兇器も之を害すること能わず、(同 364: 378, 396) 現世に於てはあらゆる悲慘、病苦を免れて天壽を全うし、富貴名譽を得、(同 363, 364, 366, 377, 396) 三毒を離れ、(同 366) 盜王の押收を免がれ、(同 366) 邪惡なる盜賊も打ち勝つ能わず(同 394) 優れた容色に恵まれ、(同 366) 死しては天界に生れて無量の福を獲る(同 364, 370, 388, 391) 等の利益を得ることが詳細に説かれている。そしてこの經典は「我は大なる苦難にある有情を解脱せしめん。我は全世界の盲人のために目とならん。我は光明を得て冥闇を追い拂わん。我は未だ度せざりし有情を導き度せん。我は解脱の境に於て不自

由なるものを自由ならしめん。我は安穩、優れたる智見を得、全世界を恐れ慄くことなくして進まん。我は知識に目覺め、苦惱にあるものを解き放たん。」(同39c) という佛の言葉を以つて結びとしている。この經典にはまた「一度にても善逝の御名を名指して呼べる功德は百千無量なり」(同295)と説いて、稱名の功德を稱讚している。大阿彌陀經に急恐怖縣官事者を解脫せしめると云い、(大正藏一・二308c) 華嚴經入法界品に繫縛恐怖、殺害恐怖、貧窮恐怖、不活恐怖等を離れしめると云い、(同九718b) 法華經普門品に水火の難、諸魔鬼魅の厄、怨賊の危害、縣官の拘禁を免れしめ、三毒を離れしめると云い、稱名の利益を説き、(同九50c・128c) 思益梵天所問經に衆苦を免るるを得るとある(同一548c) 觀音の利益信仰の内容が、そこに準備されているのを見る。

以上によつて觀音信仰が、釋尊が菩提樹下に於て普ねく世間を觀察し、惡魔を降伏し、苦難の中にある有情を解脫せしめる道を切り開かれたという傳承から生長し來つたものであることを明かにし得たと思うが、我々は之を傍證する二三の文獻をあげることが出来る。華嚴經入法界品に「見觀世音菩薩住_三山西河。處處皆有_三流泉浴池。林木鬱茂地草柔軟。結_三跏趺_三坐。金剛寶座。」(大正藏九718a, 同一〇366c)とあり、觀世音菩薩授記經に「阿彌陀佛法滅後。過中夜分明相出時。觀世音菩薩。於七寶菩提樹下。結加趺坐成等正覺」(同一二

367a)と記し、大唐西域記の佛陀伽耶の菩提樹下金剛寶座のことを記した條に「大地震動獨無_三傾動……佛涅槃後。諸國君主傳_三聞佛說_三金剛座量。遂以_三兩軀觀自在菩薩像。南北標_三界東面而坐。聞_三諸耆舊_三曰。此菩薩像身沒不見佛法當_三盡。今南隅菩薩沒過_三胸臆」(同一915b)とあるのがこれである。元來菩薩というのは因位の釋尊その人を指したものでないので、その修行が衆生利益のためのものであり、佛徳はこの菩薩行から生れたものであるという所から、觀音信仰が大乗佛教成立の當初に生れたと考えられる。永遠眞實なる佛としての阿彌陀佛の佛徳を明すために、法藏菩薩の永劫の修行が説かれたのも、その趣旨はこれと同一で、觀音が彌陀に結合する理由がここにも見出される譯である。大阿彌陀經、觀世音菩薩授記經、悲華經等に觀音が彌陀の後繼者とされているのも、まことに所以あることと言わねばならぬ。

無量壽經に彌陀の脇侍が説かれているのは、直接には *Budhi-dhavanasa* に過去の諸佛の上首の比丘、比丘尼、常侍の信士、信女の名が一々記されている傳承に由來すると思われるが、(Barhut にある紀元前二世紀の作と推定される過去佛の浮彫には、有髮の脇士が描かれている) 西域記の菩提樹下金剛寶座の兩脇に觀音像があつたという記事は、觀音が佛の脇侍とされるに至つた道程を暗示するものとして、興味深いものである。(Barhut の過去佛の姿は菩提樹と金剛寶座で表現されている。) 更

にまた大阿彌陀經は法華經や華嚴經よりも譯出年代が古く、觀音の利益を説いた經典としては最古のものと考えられるが、そこでは觀音の諸厄解除の中急怖縣官事者の解脱だけを記しているのが注意を惹く所である。これは Puṣyanitra の破佛によつて代表される、西紀前二世紀の印度敎國教化の趨勢に伴なう官憲の佛敎徒迫害の生々しい印象のためのように思われる。このような破佛の惡魔的な行爲にもかかわらず、金剛寶座の不動、三寶の不滅を確信し、宣説したのが、觀音信仰のそもそもの起原であつたのであらう。Avalokitasūtra にも佛法廢壞の時、之を支持するものの功德の特に大なることが、繰返し強調されてゐる。(Mahāvastu II. 370—372) 以上觀音信仰の佛敎本來の起原をほぼ明かにし得たと思ふが、それが普門品のような複雑な形をとるようになったのは、Avalokita-sūtra に見られるような當時の現世利益的な讚佛乘の風潮によるものであるが、他面佛敎以外の信仰、特に Veda や Brahmana の中に盛んに讚美されてゐる Aśvin 雙神の信仰の混入があつたことを認めざるを得ない。Aśvin (馬司) 雙神は黎明と黄昏に輝く明星で、露を下して草木をうるおす所から、厄難を除き、生氣をよみがえらせる救濟神として讚美されたと言われる。Aśvin は美貌の若者の姿をして居り、火坑に投ぜられた者や、闇黒の海洋に漂流している者を救い、夫や妻や子をほしがつている者に之を與え、その神

力を念じた鶉を狼の牙より脱せしめ、戰爭で足を切り取られた女に鐵の足を與え、蛇の毒を除き、惡魔の咒力を免れしめる等、應時速現、普門示現の救濟活動をしたことが物語られている。(高楠順次郎「印度古聖歌」137—、福島直四郎「ヴェーダ及びブラーフマナの思想」30、67—、南方民族誌叢書「印度」所收中村元「神話と傳説」186、221—参照) その普門品の所説との符合は覆うべくもない。普門品梵本偈二〇に「眼も顔も美しく慕わしい人」とあり、同二二に「不滅の法雨を雨らし」とあるのも、見のがす譯にはいかなない。馬頭觀音が Aśvin が Pedu 王に與えた駿馬に由來することは、既に學者の指適した所である。鹿野苑で最初に釋尊の法を聞いた五比丘の一人に Assaji (Aśvajit、馬師、阿濕波誓) があり、威容端正を以つて知られて居る。Apadāna にサンジャヤ外道の舍利弗が、その姿を見て「いと樂しげに身は美はしく。自制優れし彼は行く 最上克己に鍛えられ 彼ぞ不死見る人ならむ」(南傳藏二六六)と言ふ、その導きによつて佛門に入つたと傳えている。Assaji はまた薩遮尼健子を誘引して佛門に入らしめて居り、(大正藏二 35a—715a—) 邪敎徒降伏に因縁が深い。また雜阿含三七には「尊者阿濕波誓不起諸漏。心得解脱歡喜踊悅。歡喜踊悅故身病即除」(同二 267c) とある。これ等の表現に多少 Aśvin との連りが感ぜられる。もし然りとすれば佛典と Aśvin との結合は、意外に早かつたのかも知れない。